



第2会場●2F 自由研修室

■司 会/矢川 豊彦 長崎県教育庁生涯学習課 係長
猪本 満昭 福岡県教育庁京築教育事務所社会教育室 主任社会教育主事

分科会の進め方 13:30~13:35

1 「南輝子どもステーション」~どの子ども輝ける居場所を目指す~ 13:35~14:05

古谷 義子(岡山県岡山市) NPO法人タップ 代表

夢中になれば子どもは輝く。認められれば、意欲は高まる。「南輝子どもステーション」の目標は、放課後の「輝ける居場所」を創ることである。2006年の開設。学区実行委員会が岡山市から受託している「放課後子ども教室」にも積極的に取り組んでいる。11年には、活動に共感する企業が社宅を無償提供。小学生から高校生まで100名を超える子どもが利用登録しているが、毎日の常連は校区内の小学生。放課後の子どもたちには、「保育機能」と「教育機能」を共に提供し、宿題支援からけん玉、絵手紙、ダンス、時にはキャンプやボランティアまで各種のメニューで、子どもたちが夢中になれる時間を作り出すことに尽力している。

2 学校が送り出す土曜授業の「地域体験活動」、子どもを通して学校が仕掛けた地域活性化戦略 14:10~14:40

中野 晃(熊本県阿蘇市) 阿蘇市立内牧小学校 校長

子どもが動けば地域も動く。学校が「地域づくり」と結びつけた「ひとつづくり」を経営の基盤に置けば、地域の協力と活力が学校に向く。それが「子宝」の風土である。内牧小は土曜授業を地域体験と位置づけ、地域の人と自然と文化資源を教材として、校区内14地区に児童を送り出した。お願いは、「できることを、できることから」であるが、虎舞の復活、史跡巡り、町探検、各種の竹遊び、山登山など、地域は総出で子どもを迎えてくれる。子どもは体験と交流を通してふるさとの人と自然と文化を体感する。大人は、子どもの訪問に活力を得て、地域を見直し、地域の伝統文化や人間交流にも新しい動きが出始めている。

ティータイム 14:40~15:05

3 親の学びと家族の絆づくり~参加体験型家庭教育支援~ 15:05~15:35

藤崎 路子(宮崎県) 宮崎県教育委員会 家庭教育サポーター

「ドロップイン」は「立ち寄り」の意味で、センターは「親と子のたまり場」の機能の創造を目的とし、「リフレッシュ、相互支援、学習、遊びと体験」の提供を目指している。
本事業は、県教委から、3か年の約束で、「親子いきいき家庭教育支援事業」を受託し、センターが有する教育機能を生かし、ワークショップを多用した参加体験型の支援講座を開設した。対象者は、将来親となる学生から幼児期の子を持つ親とした。会場には、子育て支援センターは元より、学校と連携し、中学校、高等学校の現場を活用した。子育て中の親のネットワークが形成され、「親になる」ことについて深く考える機会を得た生徒たちの中には、子育て支援センターでボランティア活動を始めるという成果も見られている。

4 古代史跡を巡るキッズ・アドベンチャー ~少年自然の家が現代っ子につぎつけた真夏の挑戦~ 15:40~16:10

中本 祐二(鳥取県琴浦町) 船上山少年自然の家 指導主事

子どもたちは、リヤカーを引いて、真夏の道を60km歩く。日程は5泊6日。行く手には郷土が発掘した日本屈指の古代の史跡がある。伯耆古代の丘、上淀廃寺跡、むきばんだ史跡などである。歴史を学びながら、炎天下を町から町へ移動する。泊まる場所は毎日異なり、その日の目標は決められている。怠れば辿り着けない。彼らを繋ぐのは、自分たちが力を合わせて引いたリヤカーとテント生活が育む友情である。このプログラムは、少年自然の家が現代っ子に突きつけた冒険と修行の挑戦状である。忘れ難い夏を歩き切って、挑戦に応え得た少年たちは、友情も、自律も、耐性も、判断力も一気に成長する。